

Peace on Earth
地には平和

マタイ五章九節・七章二一節

このお話は、おそろく私が日本でする最後の説教になると
思っています。私が米国へ帰るまで、丁度七週間程残つて

ありますから、これから日本にあげるキリスト教会の精神や教執力
についで知るために、出来るだけ多くの教会を訪問するのに忙しいと

思っています。ですから、ある意味でこれは私の「最後の言葉」と
考えられてよいと思っています。そういうわけで、今日のお話は、

世界の平和の問題につながらる日本の情勢についてこの意見と反論に
ついてという以上のものにはなると思っています。ある点で、私は自分の

見たものに対して全く批判的であり、又他の言ひ方をすれば、
現在の日本の歴史的運命であるにちがひない平和を作り出す者と

しこの任務に志した行動をすまよう。ああ、めするのであります。

何ヶ月かの間

あるイエスの御言葉が私の心に

繰返し浮かんで来ました。

その御言葉と云うのは、心にうったえる

御言葉「平和をつくり出す人たちはよいわいである。」

彼らは

神の子と呼ばれまてあろう。しと心を不安にさせる御言葉甚不

わたしにむかつて『主よ、主よ』と云う者が、みな天国にはいるのでは

ない。であります。(マタイ五九と七一) 後の御言葉を

先の御言葉の語を使って言ひ変えらるとすれば「平和！ 平和！」と

言うものか。みな平和の国をもたらすのではたい。と云ひます。

この言ひかえは、日本における平和運動に關する、私の深い

疑いを表してあります。何故ならば、日本中誰でも「平和！ 平和！」

と叫んでゐるのに、人々はミリタリズムの復活を感じ、平和を叫んでゐる

同じ人々の間に闘争心を感ぜるのさう。

一九六一年、私が米国に帰つた時、多くの人が尋ねました。

「日本は、今本当に平和愛好国ですか。彼等は又戦争を

しようとしていますか？」その時、私は本当に正直な気持ちで、

はいめの間に「イエス」と答へ、後の間には「ノー」と答へました。

日本は平和を愛する国でした。日本は二度と戦うことはなげと

思われられました。今度、私が米国へ帰った時、同じ質問が必ず

起るであらうと思ひます。しかし、今度は私は以前とちがった

答えをしなければならぬと思ひます。九十直に言つて、私は

日本の平和への次女勢力の純粹さに、疑問を抱いているからです。

私の考へを説明させて下さい。オーストリアは（先週のシヤパンタイムス）に

引用された「アーノルド・トインビーの最近のステートメントに同意します。

即ち、日本は再び戦争を……国際的な戦争をすることはないでしょう。

しかし、私の意見では、又戦うように見えるのです。経済的基礎の

欠乏は、国際間の戦争をおこします。日本は、新しい闘争心を吐き出す

国内の争いに向かつて動いているように思われまます。このよゝな考へ

基礎になるのは何か、その理由を手短かにあげてみたいと思ひます。

(一) 日本人は、映画やテレビのフログ夏夏の撲撲にあらわれているように、戦いや暴力が好きであります。ベトナム戦争に、こんなに強く反対している。日本において、Green Beret、グリーンベレーと、いう映画が、大成功し、多くの若い人や学生に喜んで見られたという事は、私には信じ難いことに思われます。多くの観衆が、暴力のテーマの上になりたっているのです。

(二) スローガンによる強い訴え。人々は、誰がそのスローガンを書き、政治的な策略家の必要によつて、スローガンがどんなに変わつて来るかという事には、深い注意を拂うことなく、余りにも簡単にスローガンに反対します。『原爆禁止』のスローガンには、どんなことが起つたでしょうか。

平和をまもるといふスローガンが、今年には平和を守つたために戦え！に変わったことを覚えていらつしやいますか。来年は

単に戦え！、といふスローガンに変わるかも知れません。スローガンの使われ方では、平和はたいの政治的道具になりました。従つて

平和は 単に人が弱い時、 単に人の集りが弱い時にだけ 手に入れない
ものなのであります。 強い時には 誰かが平和を必要とするでしようか。 それは
戦りの時なのであります。

(三) 革命の新しいアピール、 革命に打ちこむ 学生（高校生と
大學生）の数の増加は 日本の平和の立場を裏切るものであります。
革命は戦りです。 革命は 国際間の戦いではなく、 国内の戦い
に過ぎません。 しかし、それだからと 言うこと、より良いものであると
いうことは ありません。 革命的な 狂熱的闘争と、 帝国主義の
兵士の 熱狂的戦いの間には、 少々の 違いもありません。 両者とも、
永遠の 英雄たらんとする 約にとりつかれ、 両者とも、 他の人の 苦しみと
死によって 栄えるのであります。 それにも 関らず、 革命の種は 日本の若い
人達の 強い少数者の中に 根をはって います。 平和は どうなつたので
しょう。

(四) 一般の人々は混乱と楽しんでゐる事。警官と学生との

主な対決は、まるで新しいスポーツ、新しいゲームであるかのよう

に、衝突大を見物する大群衆をひきよせました。私は偶然、山田講堂

が警官によつて接收された日に、秋葉原にありました。店中の

何千というテレビセットによつて、何千人もの人が戦りを見ることが

出来ました。そして、私の見た所、どこでも、人々は楽しんでゐて、

ほい、えんじりました。警官に對する火焰びんは、恐怖や非んじみの

気持ちをもたうささないばかりか、多くの見物する人々に喜びの気持ちを

起させたのです。外国人としての私にとっては、それは「学生と警官の

間の戦い」というだけではなく、日本人と日本人の戦いでありました。

ある日本人とうしが、戦つてゐる間、他の日本人が純粋に楽しみ、

満足して見ていたのです。

(五) 日本の平和の立場は、一九七〇年の戦いの間にどうなるでしょうか。

一九七〇年の政治的目標は「平和」を要求せず、激しいデモを西女平

します。
既にある人は来年の東京に住むのに比べたら、サイゴンか
ハノイに住む方がずっと安全で心地よいだろうと言っておりま
す。

私が日本の平和のプログラムに疑念を持っていると

言ったことの意味は、これで十分説明したと田心ります。そこには

闘争へ新しい交戦状態、暴力的なデモを繰り出すこと、

政治的目的のために他の日本人を傷つけ、或いは殺さざるある種の

人々の戦う準備があります。こうして、私が見て来たところでは

日本はもはや外の国々より平和を愛好している国とは言えません。

平和を一番愛しているのは誰でしょうか。アメリカ人でしょうか。

ロシア人でしょうか。アラブ人でしょうか。中国人でしょうか。日本人でしょうか。

私達の平和を愛する気持は殆んど同じです。私達は弱り時に

平和をのぞみます。政治的利益になる時、平和を欲します。それが

自然な人間の態度です。そして、正にこの理由によって、アメリカには

キリスト教の信仰が必要であり、日本もキリスト教の信仰が必要

です。そして、ロシアにも中国にもキリスト教の信仰が必要で、国のイデオロギイは純粹の平和を許さず、たゞ政治的平和のみなのさう。

さて、

批判はもう十分なさい。私のもつていふ夢を皆さんと分かちたいと

思ひます。それは日本の全カと、キリスト教の平和の深い理解との

結びつく夢であります。どこの国も、日本程世界を平和に導く

位置に立っている国はありません。そして、日本が平和に導くという

運命を受け入れざるにたければ、我々の世界はあえらく七転八倒の

去々かも知れません。中国とアメリカ合衆国との間の戦争は、ロシア

とアメリカとの間の戦争よりもずっとありえうな事さう。そして、

日本は中国とアメリカとの間のユニークな位置に立っています。

日本の一九七〇年における歴史的な役割は、二つ二つの大執力に

もたうすことに違ひありません。もしも日本に出来なかつたら、

誰に出来るかと疑います。日本の中国文化の豊かさに対する認識

又、日本の西洋やアメリカの文化に関する現代の理解や認識は、

日本も最上の調停者たらしめよう、過去における日本の中国文化の採用、そして現在における日本の西洋文化の採用は、互に大戦争でほろびるかも知れないという、互に怖に落ち入っている二国間に平和を確立するまでの、正にこのことをするための、すぐれた準備であります。

しかし、これをするためには、日本は單に平和を叫ぶことを止めなければなりません。賢明な基礎を用意しなければなりません。日本の若い人々は革命の夢を捨て、その代りに仲裁者としての訓練を受けなければなりません。日本は両方の国に対して、如何に平和に生きることを知っている国であるかということを示さなければなりません。そして、そのためには、日本は自分自身の富や、つまり伝統的なものはかりを見ることがなく、キリスト教の平和の概念を国家の生きよかに取り入れなければなりません。日本はアメリカのたし得なかつたことをしなければなりません。平和への働きの中で、日本は中国と

アメリカ両方のしもべとならなければなりません。しかし、しもべとして、日本は兩國の主人となることか出来ぬのです。

終りに當つて、以上のべた批判とチヤレニジの中で、私の言はおうとした

ことを要せ約したいと思ひます。日本の平和運動は、全くの政治的
特殊用語であつて、日本人は皆闘争心を持つてゐるようです。

それにも関わらず、日本は世界の力と力の間に、平和の眞の仲裁者に

なるといふ歴史的運命。大變な役割を持つてあります。しかし、

政治的な平和運動は役に立たず、實際、よいというよりも、害を

与へるものであります。日本はキリスト教的平和の精神を、国の

性、生き方そのものに取り入れることによつて、他の国々がやり損った

ことをしなければならぬのであります。そして、それと共に、しもべと

仲裁者として、「神の子と叫ばれる平和を作り出す」といふ

あります。

私の日本に對する批判は誤っているかも知れません。しかし、私は自分の夢が本當になることを期行してあります。一人のアメリカ人の宣教師として、私は神様のやりかたで地上に平和をもたらしうすために、キリスト教の信仰が日本の生きた方に根をおろすことを願つてあります。平和の王、キリストが、日本を平和の国となし、私の平和のためのしもべ、全人類の平和のためのしもべとなして下さいますように。